



豊かな河北潟に
夢のある干拓地に

NPO法人河北潟湖沼研究所通信

かほくがた



こなん水辺公園でヨシ舟づくり

8月25日、カムナ葦船プロジェクト代表で冒険家の石川仁さんを講師に迎え、こなん水辺公園救援隊のイベント「ヨシ舟をつくって乗ってみよう」が開催されました。ヨシ舟の材にしたヨシは、昨年の救援隊の活動で、園内で刈り取って保管していたものです。石川さんの指導のもと作業を開始し、ヨシを束ね、ロープで少しずつ締めていくと、ヨシはだんだんと舟の形になりました。そして完成したヨシ舟を公園となりの大宮川まで運びます。草の舟なので軽そうに思えますが、実際はとても重く、ほんとうに浮かぶのかな？と少し不安になりながらも、参加者みんなで力をあわせて少しずつ舟を川に降ろします。舟は半分ほど水面に出ると、それまでの重さが消えたように、すっと水の上を進み、舟全体が水に浮かびました。その瞬間には大きな歓声があがりました。その後は交代で舟に乗ってみました。自分たちで作った舟に乗るという経験はなかなかできないのではないのでしょうか。舟上のみなさんはとても楽しそうでした。ヨシ舟の乗り心地はとても良く、安定感もあり、4人乗っても大丈夫なほどでした。ヨシ舟づくりは来年も行う予定です。また、舟に使うヨシの刈り取りも今冬行います。みなさまの参加をお待ちしています。

CONTENTS

河北潟の仲間たち・29
「カタツムリ」 高橋 久 2p

河北潟の自然素材「ヨシ」の製品づくり
高橋奈苗 3p

河北潟干拓地 農業者を対象とした
アンケート調査の結果
高橋奈苗, 番匠尚子 4p

-シリーズ干拓前後の河北潟-
私の見た河北潟干拓地の30年(8)
〈干拓地編〉 大串龍一 7p

〈お知らせ・活動案内〉 8p

Vol. **19-1**
2013年8月30日

第29回 ノトマイマイ



森の中で落ち葉をかき分けていたり、川の土手で草むらをあさっている時に「何をしているのですか」と時々声をかけられます。「貝を探しているのですよ」と応えると、たいていの人はいぶかしげな目でこちらをみます。陸にも貝がいるというのは、多くの人には不思議なことのようにです。でも「でんでんむし」「カタツムリ」というと、たいてい的人是は「確かに貝ですね」と納得するのですが、中にはこちらがふざけていると捉える人もいます。でも「カタツムリ」のことは良く知っていてそのイメージが強いので、こちらが殻の大きさが数ミリしかない微小な貝を探しているのだと気づく人はなかなかいません。

「かたつむり」というと、梅雨の季節にあじさいの葉の上やブロック塀を這っている数cmくらいの殻を持つ比較的大型の生物のイメージがあります。実は、落ち葉の下や水際のヨシ原には、たくさんの小さな貝が棲んでいたりするのですが、目にする機会はなかなかありません。殻の大きさが2mmくらいしかないミジンヤマタニシやケシガイなどの微小貝から数センチにまで成長するクロイワマイマイなどの大型種まで、日本には800種以上の陸の貝が生息するといわれています。

河北潟の周辺で2004年から05年にかけて貝類の調査を行いました(野村・高橋 2006)。その結果、27種の陸の貝が確認されました。いちばん目立った種はクロイワマイマイの地方亜種であるノトマイマイで、河北潟の湖岸から社叢林、民家の庭まで広く見られました。河北潟周辺では、もっともカタツムリのイメージに近い種です。その他、集

落周辺にはコベソマイマイというノトマイマイよりは少しずんぐりした、大きなカタツムリがみられました。殻の大きさが2cmほどの少し小さめのカタツムリであるウスカワマイマイは、畑に良く現れました。野菜を作っている人には害虫(害貝)としてよく知られています。名前の通り、とくに殻の口のところがもろい貝です。ちなみに同じく野菜を食害するナメクジも陸貝の仲間です。ナメクジは殻が退化した貝です。河北潟周辺では4種類のナメクジ類が確認されました。この中には体の中に薄い殻を隠しているチャコウラナメクジのような種もありました。

小さな貝類は、河北潟周辺の社叢林によく見られました。掃き寄せられた落ち葉の下や、林内の木の根元に、ゴマガイやカサガイ、ベッコウマイマイの仲間がみられました。いずれも殻の大きさが1cmに満たない貝です。河北潟らしい貝としてはナガオカモノアラガイが多く確認されました。水際や水辺の草を生息場所としています。(文 高橋 久)

河北潟の自然素材「ヨシ」の製品づくり

河北潟の湖岸や水路沿いなどの広いエリアに自生する植物「ヨシ」は、もともと屋根材や葦簀よしずなどに利用されておりました。ヨシが自生する河北潟の湖岸には、「葦場」といって持ち主に管理されたヨシ原が存在し、ヨシが資源として大事にされていました。

現在は、とくに暮らしの必需品でもなく、中国産の葦簀が安値でまわっていることもあり、地元のヨシが利用されることはありません。ヨシを使う技や文化も地域から失われています。そうしたなかで河北潟湖沼研究所では、自然に群生するヨ

シのような植物を資源として活用することを模索しています。地域に自生する植生を活用することで、地域の二次的自然（人の営みによって形成された植生や生態系）の価値を見直すきっかけとなり、小規模でも、植生の利用が産業や日常生活や遊びと結びつくことにより、持続的な利用による二次的自然の保全がはかられ、持続可能な地域社会の実現にも結びつきます。（高橋奈苗）



ヨシのミニついでに衝立

玄関やテーブル横の飾りに、河北潟の自然素材で和の空間をデザインできます。



衝立

湖面の波紋と、河北潟から望む白山の山並みを見立てた能登職人手製の衝立。



ヨシ舟

こなん水辺公園で開催したイベント「ヨシ舟をつくってのってみよう」で製作されたヨシ舟。



ヨシの門松〈宮城県石巻〉

日本で最も大きなヨシ原のある宮城県石巻の北上川では、毎年ヨシ刈りがおこなわれている。石巻の道の駅にはヨシで作られた門松が飾られていた。（道の駅上品の郷）

河北潟干拓地 農業者を対象にした

アンケート調査の結果

高橋奈苗, 番匠尚子

今年で河北潟干拓建設事業の着工から50年目をむかえる河北潟干拓地では、現在、麦や大豆などの穀類、スイカやキャベツや小松菜やレンコンなどの野菜、梨やブドウなどの果樹、酪農、水田など、色々な農産物が生産されています。農業を営む人たちは、どのように営農し、どのような問題に直面しているのでしょうか。また、干拓地全体としてどのような問題があるのでしょうか。現状を把握し、今後の干拓地農業を展望するため、河北潟干拓地の農業者を対象に、河北潟干拓地農業に対するアンケート調査をおこないました。今回はその集計結果の一部をご紹介します。

河北潟干拓地：国営河北潟干拓建設事業により河北潟の約3分の2を堤防で仕切り、干陸させてつくられた農地。1963年・昭和38年着工、1971年・昭和46年に干陸。水田地帯をつくることを目的に計画されたが、全国的な米余りがおきたことから米の生産調整がおこなわれ、干拓建設事業中に水田から畑作へと計画が変更された。1979年・昭和54年から農地の配分が開始され、1986年・昭和61年には本格営農が開始される。農地1,071ha、施設用地47ha、道路堤防敷地230haとなっている。

●調査方法：A4サイズ4ページ・23項目の質問内容を、返信用封筒を同封して、対象者268名に配布しました。用紙の配布には河北潟干拓土地改良区さんにご協力いただきました。

●実施時期：平成24年2月下旬から5月上旬。

●回収結果：河北潟干拓地農業者268名、うち82名から回収しました。

<回答者82名について>

・性別

[回答者数75]

選択肢	回答数
1. 男性	72
2. 女性	3

・居住地域 [回答者数77]

選択肢	回答数	市町村名	回答数
1. 石川県内	77	金沢市	36
		内灘町	7
		かほく市	12
		津幡町	9
		野々市市	2
		不明	11
2. 石川県外	0		

・年齢 [回答者数78]

10代と20代は0%。

選択肢	回答数
30代	3
40代	4
50代	19
60代	27
70代	21
80代以上	4

・営農開始時期 [回答者数80]

選択肢	回答数
1. 昭和54年	22
2. 昭和55～59年	24
3. 昭和60～63年	9
4. 平成元～6年	5
5. 平成7～11年	6
6. 平成12～16年	7
7. 平成17～22年	6
8. 平成23～24年	1

<干拓地での農業について>

Q1. 河北潟干拓地の魅力を1つあげるとしたら何ですか。

例：広大さ、牧歌的風景、市街地近郊、ひまわり、畑作酪農地帯、野鳥の宝庫など

[回答者数60] (回答は自由記述形式)

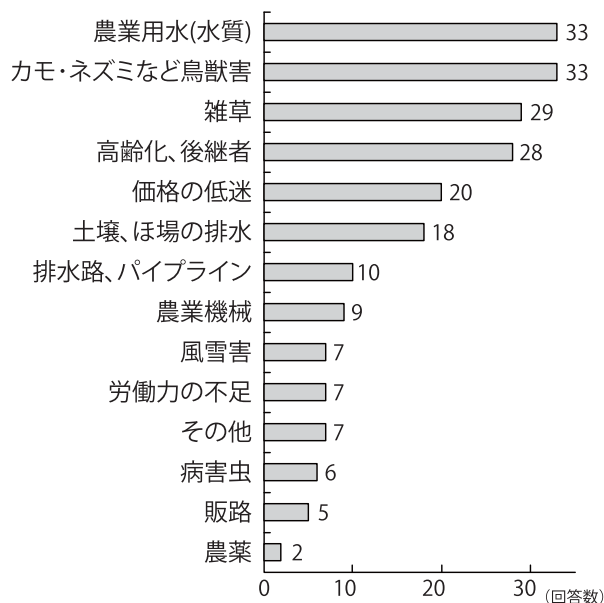
この設問では、さまざまな回答をいただきましたが、おもに3つの内容に分けてみる事ができました。多かった内容の順にご紹介いたします。

Q1の回答

- 『広大さ』作業効率が良い、景観が良い、気分の良さ、周辺を気にしなくてよいなどの理由から広大であることをあげた方が34名いました。
- 『市街地近郊である』通勤しやすい、消費地に近いことなどを理由に、11名の方から回答がありました。
- 『農業に特化したエリアである』周りもすべて農地、騒音などを気にしなくてよい、農業のためのエリアであることが魅力であるという方が7名いました。
- その他、「牧歌的風景」「畑作酪農地帯」「営農しやすい」「害獣が少ない」「一日中太陽が当たる」などの回答がありました。「無い」と回答された方も6名いらっしゃいました。

Q2. 現在、河北潟干拓地で農業を行っていて、営農に支障をきたすこと、改善が望まれることなど、問題が大きい順に3つまで選んで○をつけてください。〔回答者数79〕

Q2の回答



「農業用水（水質）」と「カモ・ネズミなど鳥獣害」が最も多く、214の回答数のうちそれぞれ約15%をしめました。次いで「雑草」、「高齢化、後継者」が約13%、「価格の低迷」が約9%、「土壌・ほ場の排水」が約8%でした。

Q3. とくに問題に感じていることの詳細をお聞かせください。〔回答者数30〕（記述式回答）

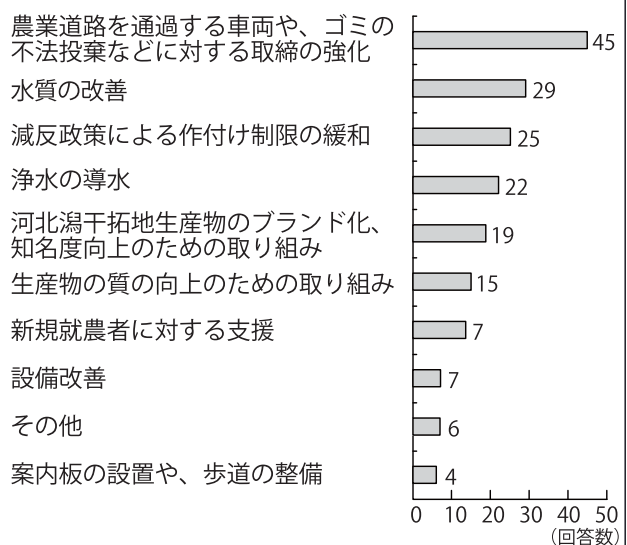
Q3の回答

とくに多かった回答が水に関するものでした。ほ

場の排水の悪さ、水質の悪さ、排水路、パイプラインなど設備の老朽化などがあげられました。また食害について、カモによるレンコンへの食害、カモによる害が冬野菜へ及ぶことの心配、ネズミによる野菜への食害などがあげられました。その他、高齢化と後継者の問題、衰退傾向にある防風林についても複数の方から回答がありました。

Q4. 行政に対して、要望や、改善してほしい点について教えてください。該当する番号に○をお願いします。〔回答者数78〕

Q4の回答

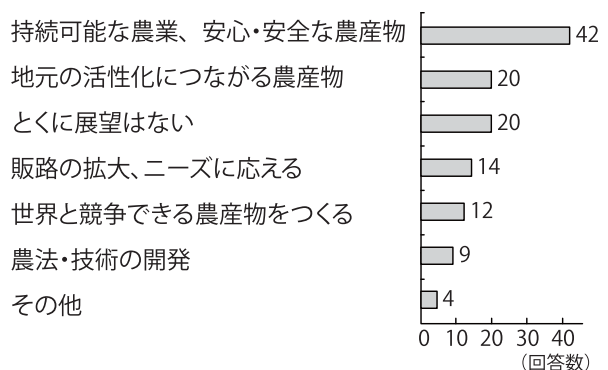


とくに「ゴミの不法投棄」に下線を引くなどして強調する方が多くみられました。その他には以下の記述がありました。

「水や道路の管理を無料で行ってほしい」、「旧耕作道の補修」、「幹線道路の確保（耕作者により通行止になっていて通れない事がある）」、「水田を増してほしくない」、「水田用のかんがい整備を考えてほしい」、「盗難の防止対策」、「行政は総合的取り組みが必要」。

Q5. どのような展望をもって河北潟干拓地で営農をしていますか。あてはまる内容に○をつけてください。〔回答者数75〕

Q5の回答



アンケート調査の結果

Q6. 今後10年について、どのように河北潟干拓地で農業を続けていきたいと考えていますか。該当する番号一つに○をお願いします。また、その理由をお聞かせください。

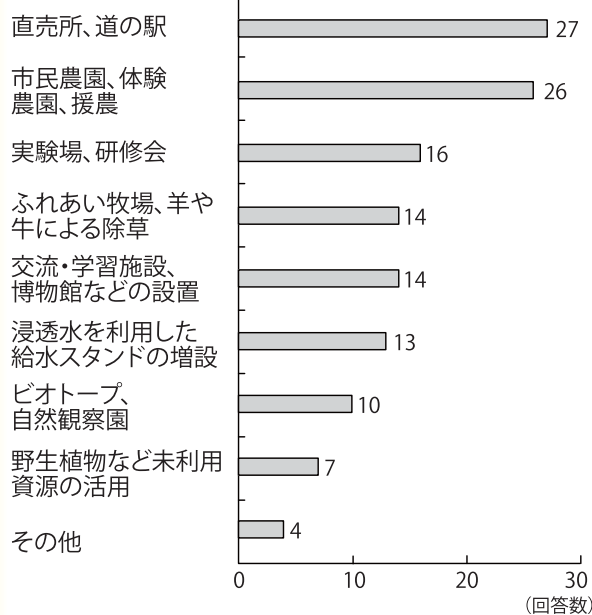
[回答者数74]

Q6の回答

「現状のまま続けていきたい」という回答が約57%、次いで「廃業を考えている」が約16%、「規模の拡大を考えている」約12%、「規模の縮小を考えている」が約7%、「栽培品目の変更を考えている」約5%、その他約3%でした。

Q7. 河北潟干拓地の多面的な有効利用として推進されてほしい内容の番号に○をつけてください。 [回答者数67]

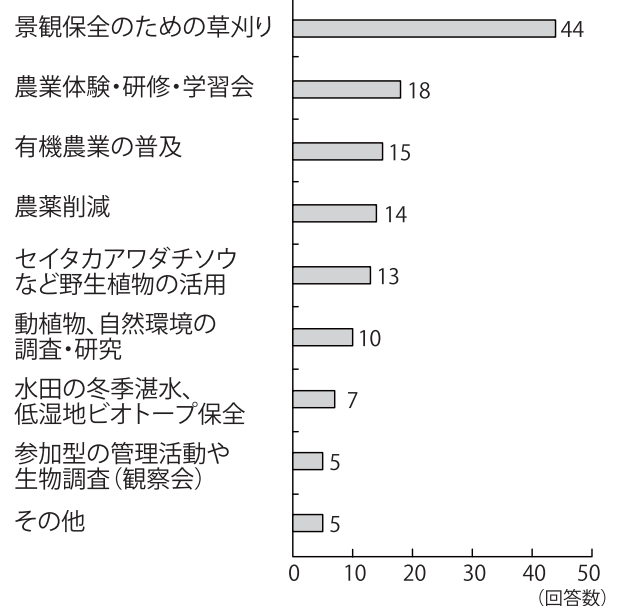
Q7の回答



回答数131のうち、「直売所、道の駅」と「市民農園、体験農園、援農」がそれぞれ約20%をしめました。次いで「実験場、研修会」が約12%、「ふれあい牧場、羊や牛による除草」、「交流・学習施設、博物館などの設置」、「浸透水を利用した給水スタンドの増設」がほぼ同数で続きました。

Q8. 河北潟干拓地に望まれる環境保全活動に○をつけてください。 [回答者数63]

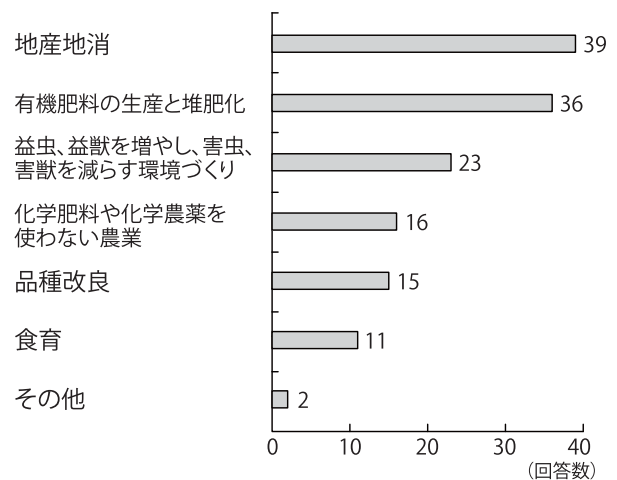
Q8の回答



回答数131のうち、「景観保全のための草刈り」が約34%をしめました。「農業体験・研修・学習会」が約14%、「有機農業の普及」がおよび「農薬削減」が約11%、「セイタカアワダチソウなどの野生植物の活用」が約10%、「動植物、自然環境の調査・研究」が約8%でした。

Q9. 持続可能な農業として、河北潟干拓地に望まれる内容に○をつけてください。 [回答者数67]

Q9の回答



回答数142のうち、「地産地消」が約27%、「有機肥料の生産と堆肥化」が約25%、「益虫・益獣を増やし、害虫・害獣を減らす環境づくり」および「化学肥料や農薬を使わない農業」が約11%でした。

私の見た河北潟干拓地の30年（8）

大串 龍一

熱帯アジアの自然から河北潟を考える

私の河北潟干拓地のノネズミ調査は1976年（昭和51年）に始まって、大学を定年退職した1995年（平成7年）の前の94年の秋まででいちおう終わった。1995年から私は国際協力事業団の仕事でインドネシアのパダンに駐在することとなった。2年間暮らすこととなったスマトラのインド洋岸、赤道直下にあるパダンの町とその周りの山野は水田地帯に森や荒れ野が混じった、見慣れた日本の農山村とよく似た景色だった。私はインドネシアの大学の教員や学生たちと一緒に、熱帯雨林帯の森や農耕地の昆虫を調べながら、河北潟や白山の野生動物を思い出し、雪深い北陸の自然とこの熱帯の自然がどう違っているか観察した。そうして気が付いたことはこの野山ではネズミ類やその生息痕跡がほとんどみられないことだった。

日本の野原や森では、目立たない所に一時間ほどじっと座っておれば、小さな葉ずれや落ち葉を踏む足音がして、アカネズミやハタネズミが出てくることがある。また草むらや地面に注意すれば、このような小動物の痕跡が見つかる。昭和40年代までは市街地でもイエネズミの生息痕跡はよく見つかった。ところがほとんど木造建築でまわりには田畑と林や草地が広がっているスマトラの町や田舎ではネズミやモグラ類を見かけない。今でもトラや大蛇が住み、庭にはサルやオオコウモリがやってくるこの村の周りの森や畑にネズミやモグラが見られないのはどうしたことだろう。

私の研究所はパダンの郊外の村はずれに2棟の建物がポツンと建っていた。私は毎日、研究所のま



水田の刈あとや畦の草を食べる水牛と、そのまわりに群がるサギ

わりの草地や林を歩き、草や樹や動物を観察した。よく目に付く動物は大小さまざまなトカゲやヤモリだった。ヘビも現地の人たちはよく捕ってきた。高温多雨の熱帯雨林帯でこの爬虫類の多さは意外だった。家の壁や天井にはヤモリが何匹も止まって時々は虫を捕っていた。高い草の葉上や灌木の梢、家の壁などで必ず見かける中型・小型のトカゲやヤモリをみていると、日本で虫や樹の実などを食べているアカネズミやジネズミの生態的地位が、これらの爬虫類によって置き換えられているのではないかと感じた。草地では放してある水牛や山羊が草を食べている。柵をしてないところへでも入ってきて草を食べてしまう。生態系のサイクルはこれで成り立っているらしい。

私は町はずれの林や草地にはアカネズミやハタネズミが住んでいるのは当たり前のように思っていた。しかしそれは日本の自然の姿なのだ。このスマトラ西海岸も日本の北陸の平地も、一見すればよく似た水田地帯に森や草地が広がる里地・里山の風景である。しかしよく見ると草木も動物も違っていて、それで自然の安定が保たれているらしい。私はこの熱帯

アジアの自然を体験して、世界にはそれぞれの土地に違った自然があることをあらためて実感した。



村の道へ出てきたカニクイザル（↑）

スマトラの村（←）

この家の中でもまわりの樹や草地でも大小のトカゲやヤモリが活動している。



今年も田植えからやっています。

河北潟湖沼研究所として取り組む稲作も2年目となりました。今年からは田んぼが2枚になりました。田植えも2回目となって参加者の皆さん慣れてきましたが、田んぼの面積が2倍以上になったので、たいへん苦勞して田植えを終わらせました。その後はスタッフが日常の管理を行っていますが、なかなか大変です。というのは今年から導入した小型トラクターの操作に慣れておらず、代かき時にでこぼこにしてしまったことと、新しい方の田んぼの畦の水漏れがあり、水に浸からない場所が所々にできてしまったことで、そうしたところから雑草が一斉に生えてきたからです。毎日のように草取りをしていましたが追いつかない状況です。無農薬で取り組んでいます。昔の米づくりがいかにたいへんだったかが分かり、いい体験になっています。それでもがんばって除草をしていますので8月までは順調に育っています。次の号で、きっと稲刈りのご報告ができるでしょう。



田んぼ調査はじめています。

一般社団法人アクト・ビヨンド・トラスト「ネオニコチノイド系農薬に関する企画」の助成を受けて、水田の生き物調査を行っています。私たちが昨年から無農薬栽培をはじめた圃場、長年無農薬栽培を続けている圃場、慣行的農業を行っている圃場を対象に調べています。今のところ種類の同定やカウント等の作業まで進んでおらず、サンプリングした標本を保存している状態で詳しいデータを示すことはできませんが、サンプリングの際に圃場ごとの生き物の種類や数に明確な違いが見られます。本取り組みは、出穂期のカメムシ防除を目的とした無人ヘリによる農薬散布の必要性について検証することも目的としています。慣行的農法の圃場や私たちの圃場ではカメムシ類はあまり確認されていません。米の出来なども含めて結果を分析していきたいと思っています。

福島県でも調査を行っています。

田崎和江理事をはじめとして、当研究所のメンバーが福島県の放射能汚染や動植物の現状について現地調査を行っています。同時に、「河北潟の水辺を守り隊」とも連携しながら、仮設住宅団地の人たちの支援活動を行っています。

6月22日には、福島県飯舘村の川沿いや山林の調査を行いました。空間放射線量の測定や動植物の調査をしました。地元の博物館学芸員の方に案内いただき、クロサンショウウオやモリアオガエルの生息する池や希少な淡水貝類が生息する水路などを見てまわり、森の中からは多くの陸貝も見つかりました。本来はたいへん優れた自然環境を有し、野生生物の多様性の高い土地であることが解ります。人が住んでいないことで汚濁のない川はとても澄んでいて、水生生物が豊富でした。しかし、この川の水源は高度に汚染されています。こうした条件での動植物の保全が、除染や人の不在ということを絡めて、難しい問題となっています。

6月23日には、南相馬市の仮設住宅団地を訪れて、七夕かざりをつくって交流しました。



編集後記

昨年よりPanasonic NPOサポートファンドのご援助を受けて、組織の基盤強化に取り組んでいます。昨年の組織診断を終え、7月からは第2段階の「キャパシティビルディング」に取り組んでいます。なかなか厳しい取り組みですが、貴重な機会をいただき、来年の創立20周年に向けて飛躍の年としたいと思います。ニューズレター新年度の第1号から発行スケジュールがずれておりますが、正会員・友の会のみなさまのご支援よろしくお願いいたします。(T.)